

## 第6章 民俗調査

### 第1節 調査の目的と経過

高砂市には、古来より生活の中で生まれ、今日まで継承されてきた、風習・習俗・祭礼・年中行事などがある。これら、地域に残された民俗文化財を調査し、現状を把握することで、人々の暮らしに息づいてきた、身近な歴史や文化財を再認識することができる。

高砂市の地域に特徴的であったり、今後のまちづくりに寄与できる可能性のある民俗文化財を調査することとした。調査の担当は、同日に市内各所で一斉に行われる行事は地区を分担し主担当がとりまとめ、それ以外は担当によって調査を実施した。

調査の内容・担当者は、下記のとおりである。

	対象	実施日	調査主担当
夏の行事	七夕	7月7日・8日	曾根 文省
	盆踊り	7～8月	曾根 文省
	地蔵盆	8月23日	横山 奈央子
祭礼行事	米田天神社	10月10・11日	横山 奈央子
	生石神社	10月17・18日	曾根 文省
	連中組織	—	横山 奈央子

調査にあたっては、久下隆史氏（高砂市文化財審議委員会委員）の指導を仰いだ。

#### ①七夕

曾根・北浜地区では、紙でつくった人形を、七夕の日に家先につるす行事が、全国的にも珍しく残されている。平成21年7・8月に現地で聞き取り調査を行った。

#### ②盆踊り

古くは播州音頭が、夏祭りとして、市内各地区で行われていた。行政が関与した時期を経て、現在行われている市民主催の夏祭りの現状を調査した。

#### ③地蔵盆

市内76か所に残された地蔵で行われている盆の行事である。平成10・11年度に、高砂市教育委員会が実施した、市内石仏調査で、地域で地蔵を管理している住民に、地蔵のいわれや、毎年行われている地蔵盆の行事について、聞き取り調査を行っている。その成果を活用し、平成21年と22年の8月23日に聞き取り調査も行った。

#### ④祭礼神事

播州地方の各神社では、盛大な秋祭りが催行されてきた。今回の調査では、市内神社で未調査の祭礼を調査することとし、平成21年度に催行された、阿弥陀町の生石神社と、米田町の米田神社の、秋祭りを調査した。祭りの現状と、祭りを支える組織についても調査した。

#### ⑤連中組織

播磨南部にある地縁組織で、秋祭りを支えるだけでなく、人生を支える集まりである。曾根町を中心に、連中組織の聞き取り調査を行った。

### 第2節 民俗の概観

#### 1. はじめに

近世の高砂は、加古川上流域の年貢の集散地であり、港町として商業活動が盛んな町人の町でもあり漁業に携わる漁師の町でもあった。高砂神社の秋の祭礼には、船渡御の指揮も漁師を統率する魚翁がとったという。現在、三年に一回行う宵宮の船渡御の運営には、漁業組合が大きな役割を担っている。

また、農業の面から見ると米とともに商品作物としての綿作が大きな比重をしめており、塩田や竜山石の生産も盛んであった。

こうした経済活動で生み出された富を背景に、市内の祭礼文化がつくられていく。ここでは、市内の特色ある祭礼を中心に民俗の概観をのべたい。

兵庫県下の民俗の特色は、共通する民俗行事が一定地域に分布することである。播磨地方には、正月の寺院で行う鬼追いや、祭の屋台、獅子舞のほか、中央部にはジョマイという王の舞が分布している。

高砂市域には、市川流域に分布する七夕に着物を献上する習俗が残っている。祭礼行事では、ヒトツモノとニワカ太鼓が分布している。

#### 2. ヒトツモノ

市内の祭礼に出るヒトツモノは、県の無形民俗文化財に指定されている曾根天満宮のほか、荒井神社、平成16年に復活された高砂神社に残っている。

こうしたヒトツモノは、市内だけに分布するものではなく、全国的に分布しているが、県下においては高砂市を中心に東播磨、西播磨の一部に分布するに過ぎない。

すでに述べたように市内には、ヒトツモノが三社の祭礼に登場し、県下でもその分布が密である。

その中においても、曾根天満宮のヒトツモノは、氏子の曾根、伊保崎、阿弥陀の3地区から4人が出る。その装束は、『高砂市史曾根篇』によると、「幼少の六才から八才位迄の者から選ばれ、赤、青、黄等の狩衣を着て、頭には花笠といって、竹張りの籠形笠に山鳥の尾、造花の菊等を三本ばかりさしたものをかむり、手に中啓を持って、顔は白粉をぬり、額に八の字を書いた姿」とある。高砂神社は、狩衣、指貫姿に山鳥の尾と花を着けた金色の冠を着ける。荒井神社は狩衣、袴に烏帽子を着けている。衣装に差異があるが、傘をさしかけ、馬で神事に神社に出向くのは共通

している。

このヒトツモノについては、神が依りつくヨリマシという説や、祭礼の風流の一つという説があるが、ヨリマシにしては現存する神をかたどった童子神像の姿とは異なっている。ヒトツモノの論文ではないが、堀井令似知は『京都のことば』（和泉書院、1988. 11）で、上賀茂神社のヒトツモノを紹介している。それは、料理をしないで供える神饌名であったという。この話は、ヒトツモノを考える上で大きなヒントになる。おそらく、ヒトツモノは祭礼に当たって神に献上する稚児であり、それ故に美々しく着飾って神事に参勤したのであろう。こうしたヒトツモノの役割が、祭礼の風流の一つ、神が依りつく稚児という二つの説を生み出していくことになるのである。

こうした、全国のヒトツモノの分布や県下の事例、その役割についての諸説は、兵庫県教育委員会が編集した『稚児の祭礼—ヒトツモノをめぐる—』（兵庫県教育委員会、2006. 3）が詳しい。詳細は、本報告書にゆずることとする。

### 3. ニワカ太鼓

今一つ高砂市を代表する民俗行事は、荒井の荒井神社や小松原の三社大神社の祭礼に青年会や祭典委員会が出す「仁輪加太鼓」である。ニワカといえば、岐阜県的美濃流しニワカ、大阪府河内地方の河内ニワカ、広島県の甲山だんじりニワカ、高知県の佐喜浜ニワカ、福岡県の博多ニワカや本田ニワカなどがよく知られている。『祭・芸能・行事大辞典』（朝倉書店、2009. 11）によると、全国に約30ヶ所で傳承されているという。

ニワカは「俄」という字を用いるが、「仁輪加」「仁和歌」「仁和加」など当て字を用いることが多い。当市でも「仁輪加」という字を用いている。

その多くは、社会問題や時事的な話題を出演者がドラマ風に方言を用いて演じ、最後は洒落で落とすというものが多。芝居というよりも、話芸の要素が強い芸能である。出演者の恰好は、役にあった衣装を着けて化粧をし、博多ニワカでは、鼻から上に被る半面を着けている。演じる場所も、ダンジリの上やダンジリ前を画して演じるほか、ニワカ車を用いて町内を流し、辻で演じるなど定まった方法はない。

少し異色なものとしては、福岡県甘木市「甘木盆俄」は、素人歌舞伎をニワカといい、石川県能登島のニワカは、豊年踊や団七踊の即興的な振り付けや仮装の踊をニワカと呼んでいる。こうした歌舞伎や即興的な踊の振り付けなどをニワカと呼ぶのは、市内のニワカ太鼓に共通するものがある。

近年、福井県勝山市の勝山左義長まつりの造り物がニワカ的な要素があると注目されている。その造り物は、社会性や時事問題などを取り上げた干支の動物を日用品で造り、

その説明として川柳を添えるというものである。寅年ならば、提灯で虎を二匹造り、「寅年にタイガーいないプロゴルフ俺が灯ともす世界を凌駕」（上袋田地区）という具合である。この趣向も、市内のニワカ太鼓の造り物に通じるものがある。

ここで、市内のニワカ太鼓の事例として、荒井神社を取り上げて概要をまとめておきたい。荒井神社においては、昭和40年以前には東所、中所、西所に青年団と少年団（中部は少年義勇団）が出す6台の屋台があつた。しかし、この年に一時中断し、昭和50年に荒井青年会を新たに発足させてニワカ太鼓を復活した。

ニワカ太鼓は、7月下旬に舞を舞う舞子、太鼓を打つ乗り子を決定し、舞子は8月下旬からお師匠さんについて練習に入る。舞子は10歳前後の女子小学生1名、乗り子は男子中学生2名を選ぶ。造り物や太鼓を乗せた山車は平素太鼓倉に保管し、9月の第2土曜日から乗り子は太鼓の練習に入る。同時に、青年会も演目と関係する造り物の作成に入る。祭前日には、地ならしという総稽古があり、造り物が披露される。荒井、小松原のニワカ太鼓の特色の一つは、山車に演目に関する大きな人形等の造り物を乗せることである。

体育の日の前々日が祭礼の宵宮、翌日が本宮であるが、この両日は出立ちのあと、ニワカの旗印と6人の猿田彦の先導で、荒井神社をはじめ、町内を巡行し、定められた場所でニワカ太鼓をおこなう。この宵宮と本宮には、舞子と乗り子は、青年会が馬を組みそれに乗せて家と太鼓倉を移動する。舞子と乗り子は、演目にあつた衣装を着け化粧をする。

ニワカ太鼓の演技は、山車とは別に、その前に舞台を設け、その上で舞子が舞う。乗り子は山車の前方で太鼓を打ち、山車は連中という青年組織が担ぎ手となる。山車を担いだまま、担ぎ手、乗り子、舞子が毎年新しくつくられる歌の掛け合いをするのがニワカ太鼓である。この歌の中で差歌が2か所あり、この時には山車を高く差し上げる。真ん中あたりの中歌ではお師匠さんの三味線が入り、舞子にとっては一番の見せ場になる。

この荒井のニワカ太鼓の歴史は、不明な部分が多いが、安政7年(1860)3月付の荒井神社祭礼にて俄踊り奉納願(荒井神社文書)には、正遷宮の三日間、中村方若者が「俄物真似」の奉納を宗門御奉行所に願ひ出ている。「俄物真似」の脇に踊りという文字がある。歌舞伎などの物真似、または踊の要素を持つ即興的な物真似芸がなされたのかも知れない。

また大正14年(1925)に古帳簿を整理して重要事項をまとめた、義勇団の「記録簿」の文久4年(1864)の什物控には、「俄太鼓」という記載がある。安政7年に臨時に願ひ出

た「俄物真似」が「俄太鼓」としてこの地に定着したと考えることもできよう。江戸末から近代初頭は、大阪俄の隆盛期で、歌舞伎や浄瑠璃を取り入れたニワカが盛んに行われていたという。こうした当時の流行芸が、導入されたものと思われる。

その関係は、不明であるが天保10年(1839)9月3日付の「五人組御改帳」(加古川市大歳家文書)には、荒井村に芝居株仲間8人の者が居住し、家族を合わせると男17人、女8人の名前が上がっている。時期的には、中村方若者が「俄物真似」の興行を願ひ出た時期より21年古い史料であるが、「俄物真似」の導入の背景にこうした芝居株を持つ者の居住が関係したとも考えられる。

当市の、ニワカ太鼓は全国に多い、寸劇的な要素を持つ話芸から考えるとその傾向は大きく異なる。それだけに、意匠を凝らした造り物を播州に多い屋台(山車)に乗せ、毎年新しくつくられる演題をもとに、掛け合いと寸劇(舞)をする荒井と小松原のニワカ太鼓は、全国的にも貴重なニワカの事例といえよう。

高砂市内には、このほかにも特色ある民俗行事が各家に残されている可能性があるが、それは今後の課題としたい。

なお、本文で使用した史料は、『高砂市史』第5巻を使用した。



図6-3 荒井神社のヒトツモノ



図6-4 荒井神社のニワカ太鼓



図6-1 曾根天満宮のヒトツモノ



図6-5 小松原三社大神社のニワカ太鼓



図6-2 高砂神社のヒトツモノ

## 第3節 七夕

### 1. はじめに

七夕は、五節供の一つで、かつては全国何処でも見られた年中行事である。笹竹に願い事を書いた短冊を取り付け、色紙を様々な形に切って飾り、縁側等に立てるといった形式が平均的な内容になっている。一時はほとんど見られなくなっていたが、保育園や幼稚園で取り入れられ、逆に家庭でも復活しているようである。そうした中で織姫と彦星の伝説と共に願い事成就の言い伝えが語られたりする。その部分が強調され、全国一律のように見えるのであるが、詳細に各地の事例を検討すると様々な要素が含まれ、地域色豊かな伝承を伴っている事が解る。

### 2. 北浜町の七夕

市内北浜町や隣接する姫路市大塩町辺りの七夕行事は、紙人形を飾る特長があり、近年注目を集めている。

北浜町西浜のA家では、8月6日(月おくれで行われる)の朝笹竹を取って来て、庭先に2本立てる。その間に竹を4本渡し、最上段に子供の名前入り提灯を吊り、中・下段に袖を通して紙人形を飾る。人形と人形の間のもう1段には丸提灯を吊るし、縁側にはスタンド型の置提灯も飾る。机を据えて、スイカ、トウモロコシ、サツマイモ等畑作物を供え笹竹には、願い事を書いた短冊や、吹流し風の切紙等を取り付ける。家により二段のところや三段のところもあり、多少の違いはあるが、紙人形を飾る特長は一致している。5体くらいを二段にするのが通例のようである。現在もこの日町内を歩くと、意外に沢山この七夕飾りを見ることが出来る。月おくれの8月6日一晩で7日には取りはずす。

### 3. 提灯、紙人形の推移

提灯は、祖父母などから初七夕の祝いとして贈られることが多い。名入りのものは近年の流行であるらしく、スタンド型の立派な置提灯や、ひょうたん型あるいは舟形の岐阜提灯が嫁の実家や親戚から贈られたという。長子の初七夕の祝であり、子供が小学生になるくらいまで、毎年取り出し縁側外の七夕飾りに向かい室内に飾る。かつては、お返しとして牡丹餅を配った。牡丹餅は七夕の特別食だったのであるが、最近は作ることが少なくなっている。

紙人形は、以前は包装紙などを切って各家で作ったが、今は販売されているものを買って来る。紙を二つ折りにして着物の形にハサミを入れた素朴なものであったが、つや紙などで袴や別色の帯をつけて男女一対にしたり、装飾の多いものになっている。汚れたり破れたりすると新しくするが、多くは保存しておいて毎年飾る。中には親子二代に亘るものもある。

笹竹の方は、海に流していたが環境問題もあり、今は焼却するかゴミとして処理している。

## 4. 供物とアラカシ

七夕の供物は、スイカ・トウモロコシ・カボチャ・サツマイモ等畑の作物やモモ・ブドウといった果物が中心になる。中でもホオズキは子供に親しみ深いものであったようで、曾根町ではその実に目鼻を描いて供えたりしていた。また、子供達は「七夕さんほおずき取ってもだんないか、子どものことならだんない だんない」と唱えながら菓子などを貰い歩いたという<sup>1)</sup>。

ナスに割箸あるいはマッチ棒を挿して手足とし、トウモロコシの毛で尻尾を付けて馬の形にしたものを作る。皿に水を張り、天の川と書いた短冊を浮かべ、彦星の乗り物と称してナスの馬を乗せる家もある。願い事を短冊に書いて笹竹に取り付けるが、以前は、6日の早朝蓮や里芋の葉に溜まった露を集めて墨をすり、それで書いた。

北浜町や大塩町辺りでは、「アラカシに行く」と言って子供達が初七夕の家を訪れ、菓子などを貰って廻った。煎り豆(乾燥したソラマメを煎ったもの)が多かったが、センベイやアメになり、カキ氷の券などに変わっていったという。この風習は、昭和40年頃までであったが風紀上問題があるとして次第になくなり、初七夕の家は子供会に現金を寄付するようになった。そして近年では子供会が七夕会を主催し、子供達を集めて七夕飾りをし、菓子などを配っている地区もある。

この「アラカシ」について『あらかして』というのは、『その幸にあやからせて下さい』という意味です」と説かれ<sup>2)</sup>、そう解釈する向きもあるが、言葉が近似しているという以上の根拠はなさそうである。「アラカシ」は、敢えて漢字を当てればやはり「荒らかし」であるのは、三月節供の「ヒナアラシ」と同じである。ヒナアラシは、雛祭りに際し、子供達が供物を貰い歩いたり雛見物をしながら饗応を受ける民俗をいい、「供物を盗り荒らす行為から雛荒らしと呼ぶようである」と解説<sup>3)</sup>されるのが普通である。

七夕も同様で、かつては「七夕の供物は盗んでもよい」とされ、子供達はそれを楽しみにし、初七夕の家では特に美しく飾り、子どもたちの来訪を待ち受けていたのである。

## 5. 七夕人形の分布

播磨南東部に見られる七夕人形に早く注目したのは日本玩具博物館館長の井上重義氏で、昭和42年頃であった。同氏は「七夕人形を飾るのは、姫路市の中央部を流れる市川の東の妻鹿から高砂市曾根までの東西10kmあまりの瀬戸内に面したごく狭い範囲です。」<sup>4)</sup>と記している。

その後関心が広がり、『兵庫探検』民俗編<sup>5)</sup>でも取り上げられている。そして調査が進められ、『姫路市の文化財』には、「大塩からの形的・木場・八家・東山・白浜にかけて」、また廃絶を含めると「花田町・福崎町・市川町・大河内町・生野町など主として市川流域に見られる」と記している。

この外、高砂市域では、北浜町と曾根町にこの風習は残されている。曾根町では少なくなっているが北浜町の方は現在もよく保存され、限定された地域で行われる珍しい風習として見直されているようである。

全国的に見れば、長野県松本市の七夕人形がよく知られている。①人がた雛形式②着物掛け形式③紙雛形式④流し雛形式の大別4形式があり②と③が多く見られるという<sup>6)</sup>。いずれも目鼻を描いた頭がある。松本市立博物館所蔵の七夕人形45点は、平成17年に国の重要有形文化財に指定されている。

## 6. 人形か紙衣か

早くに注目した井上氏は「七夕人形」と呼んでいるが、近年は人形ではなく、着物に主眼があることを強調して「紙衣＝かみごろも」と称すべきと主張されることが多くなっている。長野県出身で人形・玩具の研究者である石原誠司氏は、その理由として

①地元の人が「七夕さんの着物」あるいは「ゆかた」と呼んでいる。

②地元の人の中に「着物をたくさん飾ると子どもが衣装持ちになるから」という伝承があり、地元の人が「着物」と意識している。

③ヒトガタ的な紙衣であるが、七夕が終わっても流さずに残しておき、翌年また飾るなどしており身のけがれを祓ういわゆるヒトガタ的要素がない。

という三点を挙げている。日本玩具博物館学芸員の尾崎織女氏も「紙衣」と称している<sup>7)</sup>。

しかし、二つ折りにした紙の上部中央にV字形の切込みを入れ三角形になった部分を起しているのは、目鼻は描いていないが明らかに顔であり、ヒトガタなのだろうと思われる。確かに地元では「七夕さんの着物」と称し、着物として意識しているのではあるが、それをもって直ちに本質とするのは問題が残るのではあるまいか。また、七夕のあとすぐ流さない点は、三月節供の雛人形もそうである。そのことをもってヒトガタの可能性を排するのは論拠が薄い。もう少し歴史的推移を長い時間で追究する必要があるように思われる。

## 7. おわりに

牽牛と織女の伝説をベースにした星祭に諸技芸の上達を祈る乞巧奠という中国の行事が伝わり、宮廷を中心に盛んに催行されるのは、古く奈良時代まで遡る。短冊に和歌を書いて飾るのも、琴や着物を供するのもそれぞれの技巧の向上を祈る主旨であり、乞巧奠の流れを汲む。時代と共に民間にも普及していくが、その過程でもともと民間にあった同時期の行事を取り込みながら様々な展開をして来たのである。盆の霊祭りや水辺に関わる伝承が基盤にあり、七夕の行事として成立して来たと見るべきであろう。従って

七夕の伝承の中には、星祭や乞巧奠に無関係な要素も見られるのであろう。「七夕様は初物が好き」・「七夕盆といい仏具を洗ったり、墓掃除をする。」・「女の人は髪を洗う」・「井戸さらいをする」といった習慣はいずれもそうである。紙人形を飾ったり、アラカシがあつたりするのも星祭には直接関係しない。

いずれにしても、七夕は夏の風物詩として保育園や幼稚園でも取り入れられ、北浜町や大塩町では子供会の行事としてその意義が見直されつつある。米田町塩市では、復活が呼びかけられ、35年ぶりに地域の行事として催された。7月7日の夕、家族と共に浴衣を着た子供達が提灯を手に「ホオズキとつてもだんないか」と唱えながら練り歩いたという<sup>8)</sup>。特に、紙人形を飾る七夕は子供と関わる情感豊かな行事として近年取上げられる事が多くなっている<sup>9)</sup>。取り組みによっては地域のコミュニティ形成に資し得る可能性は高いのではなかろうか。

### 〔注〕

- 1) 『姫路市の文化財』第3巻 姫路市教育委員会 1990
- 2) 『大塩に生きる人々』 1995
- 3) 『日本民俗大辞典』古川弘文館 2000
- 4) 『兵庫の郷土玩具』井上重義 神戸新聞出版センター 1981
- 5) 『兵庫探検』民俗編 神戸新聞社 1971
- 6) 『あなたと博物館』松本市立博物館ニュース 157 2008
- 7) 『世代をこえた食セミナー』尾崎織女 2008
- 8) 『神戸新聞』2009年7月20日朝刊
- 9) 『パンカル』No.28 (財) 姫路市文化振興財団 1998  
『広報ひめじ』7月号姫路市長公室広報課 2009



図6-6 A邸の七夕飾り(北浜町西浜)



図 6-7 七夕の風景 1



図 6-8 七夕の風景 2



図 6-9 七夕の風景 3



図 6-10 七夕の風景 4



図 6-11 七夕のお供え



図 6-12 「天の川」と書いた紙の上に置かれたナスの馬

## 第4節 盆踊り

### 1. はじめに

盆おどりは、全国各地でそれぞれに特長を持って行われ、夏の風物として親しまれ、その土地の香りと共に懐しい記憶を人々に刻んで来た。その頃の旅行先でも浴衣姿の人を目にすれば、盆おどりと気付く程に共通の経験を持っている。あるところでは民俗芸能として旧態が保持されていたり、ある所では観光の目玉ともなって発展していたりする。また一方、衰微し、忘れ去られたところも少なくない。

### 2. 盆おどりととは

年々の祖霊祭祀の機会、正月や春秋の彼岸があるが、盆はその代表的な年中行事である。その習慣は、各地で様々な伝承を伴ない、変遷を経ながらも現代に受け継がれている。その基本は、祖霊を家に迎えて祭り、饗応して再び送り返すところにある。盆おどりもそうした祖霊祭祀のあり方の中から発生し、発展して来たと言われる。中世に念仏おどりなども取り入れ、早くから風流化が進み、それぞれの地方で特長ある展開をして来た。太鼓がリズムを刻み、心中やお国自慢を主題にした口説きが取り入れられて娯楽性が強くなり、祖霊祭祀を連想させない明るい行事となって行ったのである。徳島の阿波おどりや岐阜の郡上おどり等は、その発展した代表例である。デカンショ節や木曾節も盆おどりの場で唄われ、地方色豊かな風物となっている。

### 3. 市内の盆おどり

高砂市内でも、かつては8月13日から15日にかけて、あるいは地藏盆の8月23日・24日に盛んに行われていた。高砂町では、各町で広場に櫓を組み、それを中心に輪になって踊った。炭坑節・播州音頭・江州音頭・東京音頭といった曲だったという<sup>1)</sup>。

曾根町の盆おどり唄は、明石音頭であった。伊保や阿弥陀も同様で、音頭とりは櫓の上に立ち、提灯を下げた傘を手に、身振り手振りおもしろくバチ捌きをする太鼓たたきの伴奏により、夜を徹して口説いたという。口説きは浄瑠璃を題材にしたりしたが、曾根近辺では「阿弥陀心中」が多く唄われていた<sup>2)</sup>。阿弥陀の傘屋の息子佐一郎が中筋村からの奉公娘おぶんと恋に落ち、親の反対にあつて八家地藏前の海に身を投げて心中するといった物語である。これは、昭和51年に「盆おどり音頭」として採録されている。何人かの音頭とりが物語の数節づつを受け持ち長々と唄った。その交代するときに「もろた もらいました わたし がもろた(マカチョイ マカチョイ)もろたおんどなら くどかにやならぬ(ヤットコマカセ ヨイトコマカセ)」と唄って引き継いだ。( )内は、踊り手の囃である。

踊り好きの者は、日を変えて次々に催される村々の会場を廻り、陶酔する程に踊ったという。しかし、こうした風は、昭和30年代には次第に廃たれ、青年団が主催して曾根

小学校の校庭に櫓を組んで、曾根町全体で行うようにもなった。そこでは、炭坑節など誰でも知っていて参加しやすい曲が採用された。ところが、そうした盆おどりいつしか止んでしまう。

### 4. 高砂市民まつりと総おどり

昭和59年、高砂市は市制30周年を迎え、盛大な記念式典と共に、お祝いの花火大会や市民パレードなどに加え、総おどりが企画される。この総おどりは、各町々で行われていた盆おどりを中央の一ヶ所に集約し、市全域からの参加を呼びかけた形になっている。そして、新高砂音頭が製作され、その場のメイン曲として取り入れられた。翌年は、第1回高砂市民まつりの中に組み込まれ引き継がれてゆくが、平成4年に至ってその有り方が検討される。そして、平成5年からは地域夏祭りとし、校区毎に補助金を拠出し、その企画・運営を自治会に委任することとなった。市民まつりは、ミス高砂の発表会や高砂式結婚式などを加え、平成13年まで継続されるが、マンネリ化と資金難のため第17回をもって休止の止むなきに至る。地域夏祭りへの補助金も打ち切られ、その実施は各地区の自主率に任された。

### 5. 地域夏祭りの進展

総おどりから地域夏祭りへ転換したのではあるが、行政主導とは言え、いずれにしてもかつての町々の盆おどりを基盤にした発想が下地になっていたと推察される。この伝統行事を踏まえて地域のコミュニティの形成と活性化の一助としよう着想されたのであろう。その意味では各地区に受け入れやすい部分はあったと思われる。

補助金の打ち切りにより、衰微に向う地区もあったが、多くは住民の自主的な動きにより、地区の総おどりとして現在も実施されている。中筋では、昨年「復活！盆おどり2009」をテーマとし、「中筋ふれあい夏祭り」が8月8日中筋小学校々庭を会場に開催された。曾根町では、総おどり実行委員会が組織され、自治会・婦人会・青少年健全育成協議会が共催し、8月1日に曾根町総おどりが実施された。因に当日のプログラムを掲げておく(表6-1)。

自治会・子ども会・PTAはじめ各種23団体が模擬店を出し、中央には、舞台風に櫓を組んで園・小・中・高生の種々の演技あり、最後には、その櫓を囲んで輪おどりがくり抜かれた。曲目は、炭坑節やおばQ音頭、新高砂音頭といった子供にも親しめるものになっている。一時、前述の明石音頭も試みられたが、多くの人知らないため盛り上りに欠けたという。

規模の大小はあるが、こうした形式が定着しつつあり、各地区工夫を加えながら実施されているのが現状である。昨年実施した地区と日程は次の通であった(表6-2)。

## 6. おわりに

現在の地区毎の総おどりは、行政の主導を契機としながらも、自主運営により次第に定着しつつある。模擬店の出店を通じ、各団体中の人的交流も推進され、それを楽しむ多くの市民が参加している。ただ、総おどりと称しながら、人々の関心は模擬店の方により多く向っているように見受けられ、制限された時間内に多彩な催が用意され、中心が分散している傾向も否めない。地域の風物として永続性を期待するとすれば、オリジナルな伝統との接続が課題となるのではなかろうか。長い歴史の中にあつたかつての盆おどりの熱を掘り出し、現代に息づかす可能性は希めないかもしれないが、よさこいソーランおどりのエネルギーは、そうした模索の中から生まれ、全国に波及したのである。

〔注〕

- 1) 『兵庫県高砂市高砂町の民俗』神戸女子大学文学部史学科 2005
- 2) 『高砂市史』曾根編 高砂市教育委員会 1964

プログラム	
17:00	開会式 青少協会長挨拶
17:02	西之町有志太鼓 夜店開店
17:05	3B体操
17:15	保育園、幼稚園、子供の園連合
17:25	バトンガールズ
17:35	チャーミー エンジェル エンジェル リップ ダンシング ドール
17:55	松陽高校コーラス部
18:10	コマーシャルタイム
18:15	松陽学園(太極拳クラブ) 曾根公民館(わかば) 太極拳はりま連合
18:30	曾根小学校有志
18:40	南之町こども祭り太鼓
18:50	わんぱく空手教室
19:10	松陽高校ダンス部
19:20	婦人会を中心にみんなで踊ろう
19:50	休憩 連合自治会長挨拶 来賓挨拶
19:55	踊り再開
20:10	休憩 祝電披露
20:15	みんなで踊ろう! 夜店閉店
20:30	閉会 連合婦人会挨拶
20:35	後片付け
20:55	全員小学校より退出
	21:00 消灯

表 6-1 平成 21 年度曾根町総おどりプログラム



図 6-15 荒井地区



図 6-16 阿弥陀地区



図 6-17 櫓に取り付けられた傘(大塩)

### 【各町・企業ふれあい祭り】

月日	曜	時間	地区・企業	場 所
7月25日	土	18:00~21:00	高砂	高砂地区コミュニティセンター
8月1日	土	17:00~21:00	荒井	荒井小学校校庭
8月1日	土	17:00~21:00	曾根	曾根小学校校庭
8月1日	土	17:00~22:00	阿弥陀	阿弥陀小学校校庭
8月7日	金	17:30~21:00	三菱重工	三菱重エグランド
8月8日	土	19:00~21:00	米田	米田神社
8月8日	土	18:30~20:30	中筋	中筋小学校校庭
8月21日	金	17:00~21:00	カネカ	カネカ芝グランド

※ 伊保地区と北浜地区は町全体ではじっしておらず、町内各単位自治会で実施している

### 【伊保地区盆踊り】

月日	曜	時間	自治会	場 所
8月8日	土	夕方	中部	
8月8日	土	夕方	梅井	すずらん公園
8月22日	土	夕方	西部	
8月22日	土	夕方	南部	けやき公園

表 6-2 盆踊り実施地区と日程



図 6-13 高砂地区



図 6-14 曾根地区

## 第5節 地蔵盆

### 1. はじめに

高砂市内には沢山の「お地蔵さん」がある。いったい幾つあるのか、現状では正確な調査記録はない。平成10・11年に石仏の調査の際に路傍の石仏・地蔵講（寺院をのぞく）76件の所在が確認されている。これ以外にも多くの地蔵があり、どの地蔵も花や手作りの前掛けなど丁寧にお世話されている様子がうかがえる。普段のお世話は、近隣の年配の女性が地蔵講などを作り当番制でされているところが多いようである。そして8月に一年に一回の祭りとして地蔵盆を行う。どのような祭りを行うか紹介したい。

### 2. 市内の地蔵

地蔵には色々な来歴があり縁起や霊験記を持つものも多い。それに付随して様々なご利益がある。遠く隠岐島（高砂町藍屋町「川地蔵」）や四国の立江寺（高砂町南渡海町「立江の地蔵」）から授かったもの、川や田・工事現場から出土し祀られるようになったと伝えられるものも多い。

地蔵にはご利益を求め、健康・受験・子安など様々な事を祈る。日数を限って祈願する「日切り地蔵」（阿弥陀町豆崎）や種類は問わないが一願だけを祈る地蔵（阿弥陀町南池「幸福地蔵」）、病気平癒など特定の願い事だけにご利益のある地蔵もある。荒井町千鳥の「鳥居先地蔵」は酒飲み地蔵や酒かけ地蔵とも呼ばれており、酒をかけ願かけを行うという。

そして地蔵と言えば『西院河原地蔵和讃』にあるように賽の河原で幼くして亡くなった子供を守る菩薩である事から、子供の成長や産育に係わるものがとりわけ多い。市内には子育て地蔵・子安地蔵と呼ばれる地蔵が沢山あり、その利益も子授け祈願から子供のオネショ治しまで様々ある。このことから、関西では、地蔵盆は子供の祭りと認識されておりこれは、高砂市でも同じである。

### 3. 高砂の地蔵盆

地蔵菩薩の縁日は毎月24日であり、地蔵盆は宵縁日にあたる8月23日を中心に執り行われる。高砂市でも、昔は8月23・24日と2日間、盆踊りや相撲などが行われてとても賑やかだった事、辻々の地蔵で行われておりいくつもの地蔵盆を渡り歩いて楽しんだ事を語る人も多い。現在では催行する人々の都合に合わせて8月23日の1日のみ行われているところが多くなっている。また、盆踊りは地蔵盆の行事としては行われる事は無くなっており、相撲を確認出来たのは1ヶ所だけであった。

ところで高砂市内で行われている地蔵盆の行事には2つの形態があるように思える。1つは、大人が子供の健康や成長を祈り、信仰行事として行うもので、僧の読経や地蔵講の人が御詠歌をあげたり数珠繰りなどを行う。そして、近隣の人のお参りがあり、特に子供にお下がりとしてお菓

子を配る。もう1つは、町内の子供の集団が中心となって行い、大人は関与せず年長の子供が仕切る夏の行事である。

### 4. 大人が行う地蔵盆

大人が行う子供の祭りは、子供の無事な成長を祈り、普段地蔵の世話をしている地蔵講や地元の自治会・老人会などが主体となって行なわれる。

高砂町農人町「子安地蔵」では、地蔵講全員で祭りの準備を行う。以前は2日間行っていたが、平成20年からは8月23日の1日のみとなった。前日に買物、早朝より掃除や準備を行う。午前中に十輪寺・極楽寺、午後には月西寺のお参りがある。お参りに来た人に渡すお菓子を150個用意しており、大人に交じって講員の孫など子供の接待する姿があった。また、大人に連れられた子供達のお参りもある。

### 5. 子供の名前入り提灯

高砂町農人町では、子供・孫が生まれたら健やかな成長を祈り提灯を奉納する習慣があり、地蔵盆には過去の物も含め多くの提灯を飾る。提灯には名前の他に干支や年齢が記されており白と赤の二色があって女の子は赤にする人が多い。このような名前の提灯は市内各所で見られる。また、今は吊るしていないが昔はあったというところもある。

米田町の各地蔵では、提灯ではなく子供の名前を染めた幟を奉納し、それを地蔵盆に掲げる。米田町中條では、これまで幟だけであったが、平成21年に名前入り提灯が奉納され、吊るすようになったという。

### 6. 地蔵のお供えとお下がり

地蔵盆の当日には菓子や季節の野菜・果物などが仏前に供えられる。その中に塗りのお膳に盛られた精進料理がある。椀にさまざまな料理を盛り付け供えられる。平椀には、高野豆腐と野菜（椎茸・人参・牛蒡・オクラなど）をアゲで巻きカンピョウで結んだ料理が盛られているところもある。これはオヒラと呼ぶ人もあり、高野豆腐はもどさず、野菜も火を通してはいないが、見た目は美しい。また、飯椀には白飯のところと赤飯を盛っているところがある。この膳は、一年に一度地蔵盆の日にお供えする地蔵講が多い。

お参りに来られた人や特に子供にお下がり用に配る菓子を用意してある。米田町では菓子をもらう為に子供達が自転車に乗って地蔵を回る姿が見られた。また、米田町の各地蔵では、赤飯や小豆ご飯を供え、おさがりに小さく小分けして配る。これを「ごくさん」と呼ぶ。荒井町東本町「子安地蔵」では、おさがりに紅白の餅を配る。ここでは、子供の菓子の用意はない。近年は、残念ながら子供のお参りがなくなり、用意しなくなったところも出てきている。

### 7. 子供が行う地蔵盆

次に、子供たちが中心になって行う例を紹介したい。

阿弥陀町豆崎では、小学1年生から中学3年生までの子供たちが、中学3年生の指揮の元、23日・24日に地蔵盆を行

う。23日の朝、東西に別れ地区を回り賽銭を集める。昼食を食べた後は、自由行動となるがお堂に詰めている子供達も多い。夜、地藏の世話をしている観音講の女性がお経をあげに来る間は、近くのグラウンドで花火を行う。夜は、希望者がお堂に泊まる。24日は片づけを行い昼食後、解散となる。集めた賽銭でこの2日間の食事代(23日昼食・夕食・24日昼食)と23日夜の花火代などを賄う。子供達だけで外出に出かける事が大きな楽しみになっている。

阿弥陀町阿弥陀東でも、小学1年生から中学3年生が集まり、中学3年生を中心に行事を行う。23日朝から子供達でお堂の掃除を行い、地区を回り賽銭を集める。夜には地藏講の人やお参りの人が集まりお経をあげ、子供達にはお菓子和賽銭が配られる。平成17年頃までは、お堂に泊っていたが現在は行われていない。中学3年生が行う重要な仕事は、子供達で集めた賽銭の配分である。配分する権利は中学3年生にあり、3年生だけで相談して学年ごとの金額を決め小袋に詰めていく。賽銭を集めるのにも上手下手があり年によって金額に大きな差が出るそうである。年少者を少ない額にすれば自分達の取分が多くなるが、これが年長者の度量の見せどころとなっている。

阿弥陀町魚橋では、地区内に多くの地藏があるため住んでいる場所により担当する地藏が決まっている。この担当は男子4(5)・女子2ある。男子は小学1年～中学2年まで、女子は小学1年～6年まで参加する。子供は「〇〇(担当する地藏の名前)の地藏さんのこころもちお願いします」と言ってお金を集めるが、いくつも地藏があるので1軒の家に何人もの子供が集めに来る。そのお金で、配るお菓子(50～60個)を用意し、23日夕方までに地藏の掃除や飾りを子供達で行う。現在では、子供が減り一人で担当している地藏や来年以降地藏盆を担当する子供がいない地藏も出てきている。夜になると大人も子供も、地区内のいくつもの地藏を巡る。片づけは23日の内に終わるが、24日に昼食を食べて終了となる。昭和50年頃まではそれぞれの地藏で年長者がカシラとなってその家でご馳走を食べたり、肝試しを行っていた。

豆崎や阿弥陀東では、現在女子も参加しているが数年前までは男子のみの行事であった。けれど魚橋の女の子の地藏は、最近になって子供が減って女子が参加するようになったのではなく、少なくとも30年以上前からあり、その方の親の世代からも、女の子だけで守っていたのではないと言われる。

## 8. 2つの地藏盆

このような2つ形態は、地域によって分けられているのではなく、同じ地藏でそれぞれが行事を行う姿が見られる。

伊保町伊保東の「網堂の地藏」では、23日の昼からの時光寺の僧の読経で始まり、その後相撲へと移る。堂内で地

蔵講による祭りが、地藏堂の前の広場では子供達によって相撲が行われる。それぞれの行事は、別の組織が行っており統括する人などはいない。

相撲を取り仕切るのは中学1年生の男子である。生涯で1回だけの仕切だと地元の人は言う。事前に地域内から費用を集め、そのお金で参加した子供に配る景品やお菓子の用意をする。土俵づくりやテント張りも中学1年生が親の協力のもと準備する。相撲の行司役は、最初の取り組みは時光寺の僧が行うが、その後は中学1年がする。幼児から小学6年までが参加し、現在では女子の参加もあり女の子同士の取組も行っている。以前は、男子のみでマワシをしていないと土俵に上がれなかったが、今は洋服で参加している。ここでは、お堂に泊る事は昔からない。

荒井町小松原には2つの地藏堂がすぐ近くに隣同士のようになり、地藏盆では、子供用と大人用と区別されている。

「どろま地藏」は子供が、「西の地藏」は地藏講でそれぞれ行事を行う。どろま地藏では、小学高学年の子供達が早朝、地藏を近くの用水路まで運び地藏を洗う。この地藏堂には100体以上の石仏や一石五輪塔などの石造物があり、そのすべてを地藏と呼び洗う。その後、地藏堂の中などで1日をすごす。以前は、22日から公会堂に小学6年の男子が泊まっていた。西の地藏は地藏講で、早朝から掃除や飾り付けを行う。大福寺のお参りがあり、その後数珠繰りや御詠歌をあげる。こちらには子供の参加はない。

## 9. 変化する地藏盆

訪ねた多くの地藏で、子供が減った事や地藏講の高齢化などで地藏盆を行う事が難しくなっているとの話であった。実際に曾根町のある地藏では、地藏講のメンバーが高齢となったため平成22年の地藏盆を行わない事を決めた。また、阿弥陀町中通は子供会がなくなり地藏盆が行えないと聞く。そうした中で、日数や行事を減らすなど工夫を凝らし、自治会や老人会または子供会が中心となって行う場合が増えているようである。

荒井町蓮池では、老人会が中心となり地藏盆を行う。ここでは、いつからか不明であるが老人会員で亡くなられた方の名を記した提灯が遺族から奉納され、地藏盆に吊るされる。また、高齢になり住んでいた土地を離れ、子供の元に引越した人が地藏盆に参加するために帰郷されている姿が印象的であった。

## 10. おわりに

地藏盆は、暮らしの中で受け継がれてきた伝統行事で、生活や環境の移り変わりにより変化してはいるが、今でも多くの人によって支えられ行われている。

子供が行う地藏盆は、社会性や自主性を学び大人へと一歩近づく貴重な機会であり今後も続いて欲しいと思わせる魅力がある。また、大人が行う地藏盆は、これまでの子供

を守る事から地域の絆を守る事に果たす役割が変化しているように思えた。様々なご利益のある地蔵にはふさわしい役割ではないだろうか。

昔から受け継がれてきた魅力ある地蔵盆を守りながらも、新しい時代に対応した物が求められていると言える。



図 6-18 お供えの膳



図 6-19 赤飯のお供え(米田町)



図 6-20 高砂町農人町



図 6-21 名前入り提灯(高砂町狩網町)



図 6-22 名前入り幟(米田町)



図 6-23 阿弥陀町豆崎



図 6-24 阿弥陀町阿弥陀東



図 6-25 阿弥陀町魚橋 女の子の地蔵



図 6-26 相撲(伊保町伊保東「網堂の地蔵」)



図 6-27 「網堂の地蔵」堂内



図 6-28 数珠繰り  
(荒井町小松原「西の地蔵」)



図 6-29 地蔵を川で洗う  
(荒井町小松原「どろま地蔵」)



図 6-30 荒井町小松原「どろま地蔵」



図 6-31 子供がお堂の前で地蔵(一石五輪塔)を洗う  
(荒井町小松原「どろま地蔵」)



図 6-32 荒井町蓮池

## 第6節 祭礼

### 1. 生石神社の祭礼

#### (1) 神社の概要

生石神社は、高砂市北中部の岩山・宝殿山の中腹、阿弥陀町生石171番地に鎮座し、大穴牟遲（おおなむち）・少毘古邦（すくなひこな）の二神を祀っている。由緒に関し『兵庫県神社史』は、「往昔大穴牟遲神、少彦名神天津神の勅を受けて国土経営せし時此所に石御殿を造り其石屑を北の方一里許なる高御座山に捨て給ふ。然るにいまだ事終わらざるに天佐久売来たりて此山の麓に軍を起さむとせる阿賀神ありと告げしかば、二神麓の里に下りて神等を集へ阿賀神を平げ天下の経営を終わら給ふ。其後ち崇神天皇十三年正月申の日二神人に憑りて此所に祠字を造りて我を齋き祀らば幸福ならむと告げ給ふ故に二神を祭り・・・」と記している。ここに見える「石の御殿」は、『播磨国風土記』に「形屋の如し。長さ二丈、広さ一丈五尺。高さもかくの如し。伝えていへらく、弓削大連の造れる石なり」とある造り石であり、万葉集の「おおなむち すくなひこなのいましけむ しづのいわやは いくよへぬらむ」と生石村主真人（おおしこのすぐりまひと）が詠んだ「しづのいわや」のことでされる。古来日本三奇の一つとされ、この謎の石造物に関して様々な論議がなされて来た。『峯相記』や『国内鎮守大小明神社記』にも記載があり、中世以降平津庄の鎮守として崇敬され現在に至っている。

氏子は、生石・魚橋・神爪・島・西井ノ口・平津・岸・辻の8地区で、輪番により、年番を務める。年番に当たると、正月準備、春祭前の草刈りや幟立てなどの奉仕をし、秋祭には神輿を出す。

#### (2) 秋季例大祭

秋の例祭は、10月第3土・日に行われる。もとは10月18・19の両日であったが、神輿の担ぎ手などの問題で昭和38年に変更された。昭和48年から子供神輿が出されるようになり近年では壇尻（島・岸・西井ノ口）や屋台（平津・岸）の他、竹割り（西井ノ口・岸・島）なども加わり、バラエティーに富んだ祭礼になっている。様々な神賑行事が取り入れられ、子供会や青年会など多くの人々が参加しているが、祭礼の中心は神輿の渡御にある。

#### ①宵宮

宵宮の昼過ぎ頃、社殿南西300mばかりの岩場にある倉から二台の神輿が引き出される。赤神輿、黄神輿と呼ばれ、前者は40歳未満、後者は40歳から42歳までのそれぞれ18人が担ぎ手になる。倉から神社登り口前広場に下りし、塩かきと称して二台の神輿を左右にゆする所作をし、本殿への坂口を登る。割り拝殿内の左に赤神輿、右に黄神輿を据え、御霊移しの神事がある。続いて真榊・御幣・ハナ・赤神輿・ハナ・神饌長持・ハナ・黄神輿・ハナと行列を組

んで倉の向いにあるお旅所へ向う。本殿下の広場で二台の神輿を数回ぶつけ合った後、お旅所に神輿を据え、お旅所祭が執行される。この後、山道を通って神輿を下ろし、町内巡行があつて夕刻定められた場所に納める。5年ばかり前までは町内に下りることはなく、お旅所で一泊しその夜は当番地区の者が泊り込みで警固に当たったという。

現在のお旅所は、本殿南西の岩場に社殿が設けられているが『播磨鑑』には「三丁計北二有御旅所十八日より十九日マデ両神遷幸有リテ此所ニテ祭事行ハル」とある。「三丁計北」とは阿弥陀町北山の入口辺りで字虫前に70坪程の社有地が残されている。かつてはこの場所で高御位山の神を迎えて祭事が営まれたというのが、詳細は伝わっていない。

#### ②昼宮

昼宮には、午前中町内を練り歩き、11時ごろ宮入りする。数回二台の神輿をぶつけ合い、広場北寄りの位置に据えると12時半頃よりその南側正面の能舞台でお面掛けが行われる。引き続き「赤ばやし」がある。赤とはハナ（鼻）とも呼ばれ、天狗面にシュロ様の毛髪をつけた姿で一台の神輿に二人ずつ付き先導を務める。この赤を担ぎ手が離立すると、赤は担ぎ手を追い散らす。最初は一人で担ぎ手が多く劣勢になると二人、三人となり最後は四人で追いまくる「参りました」と担ぎ手をあやまらせて赤ばやしは終了する。これが終わると、能舞台では島地区の青年会による伊勢神楽系の獅子舞が奉納される。この時は「洞入り」「宋来」「花遊び」の三曲が舞われた。この間広場では、屋台練や壇尻、竹割りなど盛り沢山の神賑行事が次々に展開する。今年は岸少年団の和太鼓の演奏や地元出身歌手の歌謡ショーも組み込まれていた。

14時頃になると神輿が動き出し、しばらくぶつけ合ってお旅所へ遷御、神事があつて本殿へ移し、御神霊を本殿へ納める。16時頃には神輿も倉に納まり、壇尻や屋台もそれぞれの地区へ帰る。

社務所では当番地区の直会が行われ、この席で次年度当番地区への引継ぎがある。

以上が、祭礼の大まかな流れであるが、平成21年度の実施状況を表にして挙げておく。

#### (3) おわりに

生石神社の祭礼は神輿の渡御を中心に展開するが、それに伴う伝承や伝統的な祭礼組織はうすれつつある。それに代わって自治会を中心に、子供会、青年団、婦人会等地域の様々な団体がそれぞれの工夫を尽くし参加している。祭りを契機に集い、地域が力を合わせて楽しむ有り方はそれぞれのコミュニティの形成に大きく機能しているように思われる。そうした中から新たな伝統が築かれていく可能性もあろう。

宵宮 平成21年10月17日(土)

時間	行事内容等
11:00	全員天神境内集合
11:20	記念写真(赤組・黄組)
11:40	出立ちの儀 あいさつ(町内会長) 諸注意・連絡(実行委員長) 乾杯
12:00	天神境内出発→徒歩で生石神社へ
12:30	高砂体育館前「休憩」
～45	神輿担ぎ手は各自地下足袋に縄を結びつける。
13:00	宮入り 神輿練り 神輿倉より神輿を出して軽く練り合わせる。 (赤天狗を先頭にする。)
13:30	神輿本殿入り(練り場より神輿を本殿前へ) 神事5分前に本殿前、向って右側の控え室に 本殿に向って左に赤神輿、右に黄神輿を置く 神事儀式(御霊移し) お祓い 玉串奉奠 ①町内会長 ②宮総代 ③顧問代表 ④実行委員長 ⑤神垂代表 ⑥長持代表 ⑦神輿代表 ⑧赤天狗代表 神事終了後、本殿前石段で記念写真撮影)
14:00	神輿練り(本殿前より神輿を練り場に移し軽く練る。)
14:30	神輿渡御の儀(御霊移し)神輿を御旅所に上げる。 神輿は、向って左に赤神輿・右に黄神輿 お祓い、玉串奉奠等本殿儀式同様
15:00	神輿練り 神輿を御旅所から練り場へ神輿を練り合わせる。
15:30	帰町出発→神輿を担ぎ、宮を出発→高砂体育館前へ
16:00	高砂体育館前出発→町内入口
16:30	神輿を担ぎ町内巡行→天神境内
17:00	天神境内で練り合わせ
17:10	神輿を公会堂内に格納
17:30	直会 乾杯
18:30	解散

〈子供神輿・だんじり関係〉

時間	行事内容等
12:45	子供神輿関係集合 記念写真撮影の後、花笠踊り
13:30	子供神輿町内巡行出発
16:30	子供神輿天神着、子供竹割り、解散
16:45	子供神輿を少年団役員で公会堂に格納
18:00	子供神輿関係者は神社神輿を出迎える

昼宮 平成21年10月18日(日)

時間	行事内容等
8:00	全員天神境内集合 記念写真撮影(赤組・黄組)
8:10	出立ちの儀 あいさつ(町内会長) 諸注意・連絡(実行委員長) 乾杯
8:20	竹割り 神輿を公会堂から出して軽く練る
8:30	神輿町内巡行→町内入口
9:30	町内出発→徒歩→高砂体育館前
10:10	高砂体育館着
10:40	高砂体育館出発 神輿を担ぎ生石神社へ
11:00	宮入り(神社神輿、子供神輿)
11:20	少年団花笠踊り
11:30	協賛行事関係宮入(岸、島、平津、鼓欣衆)
12:20	竹割り
12:30	お面かけ (能舞台で謡曲能舞) 担ぎ手、役員全員で御旅所と能舞台の間の空間を確保する。
12:45	赤ばやし(神輿担ぎ手全員)
13:30	余興 歌謡ショー(春川うらら) 神輿練り合わせ
14:00	神事還御の儀 神輿を御旅所へ 神輿は、向って左に赤神輿・右に黄神輿を置く 神事儀式(御霊移し) お祓い 玉串奉奠 ①町内会長 ②宮総代 ③顧問代表 ④実行委員長 ⑤神垂代表 ⑥長持代表 ⑦神輿代表 ⑧赤天狗代表 神事終了後、神輿を練り場へ この間、協賛行事(島、岸、平津、鼓欣衆)
14:30	神輿練り合わせ
15:00	神輿を本殿へ(御霊移し) 神事は宵宮本殿御霊移し同様(左に赤神輿・右に黄神輿) 神事終了後、本殿前石段で記念写真 この間、協賛行事
15:30	神輿練り合わせ
15:50	神輿倉入れ
16:00	協賛行事の帰町見送り(岸、島、平津)
16:10	神社出発帰路(子供神輿は高砂体育館前より車で搬送)
16:40	町内入口帰着
17:00	子供神輿町内巡行天神境内で解散
17:10	直会 解散
18:30	あとかたづけの後、解散

表 6-3 平成 21 年度生石神社秋季例大祭実施状況



図 6-33 鼻高と神輿



図 6-34 神輿練り合わせ



図 6-35 岸地区 布団屋台



図 6-36 お面かけ

## 2. 米田天神社の祭り

### (1) はじめに

米田天神社は、高砂市の北東部の米田町米田 503 に鎮座する。神社は加古川西岸の米田町にあり加古川東岸にある泊神社（加古川市加古川町木村）の分社である。祭神は泊大明神御分霊（泊神社御分霊）・国懸（くにかかす）大神・天照皇大神・少彦名（すくなひこな）大神。末社として境内に大歳神社・恵比須神社・住吉神社・庚申宮社・稲荷大明神がある。

神社のすぐ側には、「米田（米墮）地名発祥之地」の祠（米塚）がある。これは『元亨釈書』にも記されている法道仙人の飛鉢伝説による地名由来譚ゆかりのものである。この話では、法道仙人が法華山一乗寺から飛ばした鉢から米俵が一俵落ちた土地なので「米墮邑」となったとある。

また、宮本武蔵・伊織のゆかりの神社として有名であり、承応 2 年（1653）に伊織が泊神社の本殿を再建した折にその古材を用い米田天神社も再建したとされる。市指定文化財の絵馬「三十六歌仙」（伊織と弟小原玄昌が奉納、甲田重信他筆）と石灯籠（伊織の一族大山久太郎政次の寄進）が、隣接する神宮寺（薬師堂）には鰐口（伊織の寄進）がある。

現在の氏子は、米田・米田新・古新・塩市・美保里・中島三丁目の 6 地区である。

### (2) 泊神社との関係

戦前、米田天神社の氏子は泊神社の氏子だったので泊神社の祭りに参加していた。『加古川市史』第 7 巻の泊神社マツリの項には当番について次のようにある。

「塩市<sup>(※)</sup>は 25 年に一回、米田新<sup>(※)</sup>・古新<sup>(※)</sup>は 40 年に一回、米田<sup>(※)</sup>は 4 年に一回、船頭は 8 年に一回、加古川は 4 年に一回、稲屋は 4 年に一回、友沢は 8 年に一回、西河原は 8 年に一回、木村は 8 年に一回まわってきた。今は費用は全体でもち、世話だけ稲屋・友沢・西河原・加古川・木村が 5 年に一回する。今はこれら世話部落（町）は川東にあるが、昔はすべて川西にあった。昔の川の流路を思うべきであろう」(※…現米田天神社の氏

子地区)

このように現在の米田天神社の氏子が泊神社の祭りの当番を務めていた事がわかる。特に米田は 4 年に 1 回と泊神社のある木村より頻繁に当番を務めている。実際に戦前、加古川を渡り木村の宮（泊神社）の祭りに行った思い出のある人もいる。

戦後、加古川の西岸側にある地区の氏子が、泊神社本氏子より分かれ米田天神社の氏子となった。その後、米田天神社でも祭りをしたいという機運が高まり、自治会を中心に祭りが行われるようになった。平成 21 年の秋祭りで 34 回目を迎えた。

### (3) 秋祭り

例祭日は、10 月体育の日に近い土日。神社には神職が居らず泊神社の宮司に来てもらっていたが、平成 20 年に亡くなられたので近隣の神社にお願いしている。普段のお宮のお守りは、宮総代で行っている。秋祭りは 6 地区の内、屋台を持たない古新地区を除く 5 地区が輪番で当番町を務める。当番町は、秋祭りのための組織である実行委員会の会議でリーダーとなり祭りを仕切る。神事は宮総代が、それ以外を実行委員会が仕切る役割分担となっている。

宵宮 9:30 宮入

(1 日目) 11:00 神事

12:00 練行の後、退場

本宮 12:30~13:30 神事

(2 日目) 13:00 までに 宮入

13:10 練行 屋台披露と練り合わせの後、  
宮を出て桜公園の鳥居を往復する

15:05 子供みこし披露（米田） 公会堂前

15:30 竹割り（古新・米田）

16:10 練り合わせ

17:00 終了式及び次年度引継ぎ式

17:10 退場

本宮の神事には、氏子の 6 地区より氏子総代 8 人（各地区より 1 人・米田のみ 3 人）・自治会長 6 人・実行委員長 5 人（古新をのぞく）が出席し、お神酒や酒肴の接待役として当番町の中学生の男子が天狗の面に猩々の毛と衣装をつけたクロアカ（黒髪）・アカアカ（赤髪）を務める。

練り合わせは、大人屋台 5 台（米田・米田新・塩市・美保里・中島三丁目）と「子供みこし」「子供屋台」と呼ばれている小型の屋台 6 台がそれぞれ行う。大人屋台にそれぞれ 2~3 人のアカが護衛役としている。地区によっては女性も混ざって担いだり、屋台の中で太鼓をたたく乗り子には女の子がいるところもある。

竹割り（米田新・米田）は、盛りあげるための創意工夫の中のように平成 21 年には現金を舞い散らす余興もあった。

古新地区は、以前は古新太鼓の披露を行っていたが、平

成 21 年は行われなかった。

また、普段は無人なので神職がいるこの秋祭りの日にお参りを行う。本殿で赤ちゃんの親族と共に宮総代全員でお参りする。

#### (4) 米田

氏子の 1 地区である米田では、実行委員長を自治会長が努められており秋祭りは、自治会で開催する夏祭りと並ぶ 2 大イベントの 1 つとして位置付けられている。自治会の他、町内の団体・組織（婦人会・老人クラブ・子供会・消防団・少年団・福祉部会・補導委員・青年会・交通安全協会・PTA）のすべてが協力する。2700 世帯と世帯数が多く大人屋台・子供屋台（子供みこし）6 台・竹割りと様々な催しを行う。屋台と竹割りは青年会・少年団・消防団が実行班。子供屋台は子供会が中心に自治会・婦人会・交通安全協会が実行班とする役割分担が出来ている。

昔は、子供屋台のみであったが大人屋台が欲しいとの希望が多く平成 10 年に作製した。他の地区も同じ頃に作っている。屋台の運行に関しては、平成 21 年の時は祭りの本場である高砂市海岸部の出身者がその知識や経験を生かし事務局長として総取締役を務めている。屋台を担ぐのは地域外の人にも開かれており、そのための保険にも自治会が加入している。

竹割りを 5～6 年位前から始めており、近隣で行われている祭りを参考にして、次々と新しい催し物を取り入れている姿が見える。

#### (5) おわりに

平成 22 年 5 月に泊神社で行われた国恩祭（旧加古郡・旧印南郡の 22 の神社で 1 年に 2 社が輪番で行う祭。11 年に一度）に屋台のない泊神社での祭りを盛上げたいとの米田天神社の宮総代の願いのもと、米田・塩市の屋台と米田新の竹割りが参加した。宮総代が「泊神社と米田天神社は、親と子の関係である」と言うように今も泊神社との関係を持った上で、秋には自分達の神社で盛大に祭りを行っている。

祭りがなかった神社でゼロから祭りを作り上げていく上では、費用や安全管理などの苦勞も多いが、近隣の祭りの盛んな地域の行事を柔軟に取り入れさまざま催しを行っている。祭りには伝統と呼べるものはまだ無いかもしれないが、参加する人々を見れば自分達こそが主役となり楽しく祭りを行っている姿がある。新しい住民も多いコミュニティーの中で、住みやすい街づくりをめざし、祭りが果たす役割も大きいと言える。



図 6-37 本殿前での屋台披露



図 6-38 竹割り



図 6-39 子供みこし披露



図 6-40 天狗面のアカ



図 6-41 桜公園鳥居前



図 6-42 泊神社 国恩祭への参加

## 第7節 連中

### 1. はじめに

播磨南部には「連中(れんじゅう)」と呼ばれる若者の組織が現在も残っている地域がある。これは、同じ地域に住む同年代の仲間(男子)のグループで、兄弟同様の付き合いをする。この関係は一生続き、定期的集まるほかに結婚式の荷入れや葬式で棺を担ぐなどの人生の重要な場面を支えあう。

高砂市曾根町・北浜町の連中では、同年代が集まりグループを作るだけでなく年上の人に親分となってもらい。親分は10~15歳くらい年上の人をお願いする事が多い。実の親子ほどの年齢差はないが、生涯にわたり親子以上の関係を持つと言われる。

この連中は、親分の姓をとり「〇〇連中」と呼ばれる。連中のメンバーはワカイシュ(若い衆)と呼ばれ、若い衆は親分に対して「オヤブン」、また親分の妻を「ネエサン」と呼ぶ。レストランで「親分」と呼びかけて周りの注目を浴びたり、結婚式で「新郎の親分」と紹介され新婦の家族に驚かれるという笑い話もある。

このような親分のいる連中の現在の様子を曾根町を中心に紹介したい。

### 2. 連中を組む

現在では連中は、曾根天満宮の秋祭りに参加したい、屋台を担ぎたいとの思いから作られる。連中が祭りに参加するための単位であり、祭りの間は行動を共にする。天満宮の重要な神事である「一ツ物」で頭人の世話係りの口取りも連中単位で頼む。祭りには連中を組まずに参加する事は出来ない訳ではないが、1人で参加しても楽しくないとの返答が返ってくる。

屋台を担ぐ事が出来るのは中学校を卒業した男子と決められているので、中学生の間に仲の良い同級生のグループを作っておき、親分になってくれそうな人の目星をつけておく。連中を組む時には、両親と共に頼みに行く。

現在も新しい連中が作られているが、曾根の中にいくつ連中が存在するか知る人もなく、また把握する方法もない。その必要性がないと考えられているようである。

### 3. 親分になるための条件

親分になる人は、人望がある事が何より大切であるがその他にも条件がある。1つ目は、町内に住んでいる事。曾根町は祭りでは、東西南北の4町に別れておりそれぞれの町で屋台を持ち祭りに参加する。若い衆はどこの町に住んでいても親分の町の屋台を担ぐ。2つ目は家を持っている事で、若い衆が定期的集まる時の場所になる。3つ目は、結婚している事。これは妻の役割が大きい事を示していると思われる。結婚せずに親分を務めている人もいるが、その場合妻が行う役割を親分の母親が担うという。

晩婚化が進む現在、既婚者で男の子が何人も集まれる家を曾根の町内に建てている事はハードルが高い。そのため近年、親分のなり手がなく祭りに参加出来ない人も出ている状況であるという。

### 4. 祭り当日

祭り当日は、朝から親分の家で廻しの締め込みなどの支度を行う。そして、皆で祭りの成功や安全を祈り「出立ちの膳」として鍋料理などご馳走を食べ祭りに参加する。休憩や食事に帰るのも親分の家である。

連中を組んだ時に作る揃いのハッピーを着る。このハッピーは、襟の左に「播州曾根」、右に「〇〇連中」の文字、背中には揃いの絵柄が入る。また、襟の後ろ首の部分にも文字を入れており、ここには自分の姓名の名から漢字1字を入れるが、親分には「頭」の文字が入る。

#### A連中の場合

1年前に親分となったAさんは、31歳で高校2年生の4人の若い衆をもつ。この若い衆の中の一人がAさんの親分の子供だったので、頼まれたら断る事は考えられなかった。Aさんは結婚しているが、妻は地元出身ではないので連中の組織について理解が難しい。毎月1回、Aさんの家に集まるが、妻の負担を軽減するために2回に1回は外食にしている。祭りの朝の出立ちの膳もAさん自らオニギリを握った。祭りの時は、費用は会費制でありこれは自分の連中からの引継いだ方法である。

#### B連中の場合

14年前に親分となったBさんは46歳で32歳の若い衆5人がいる。若い衆によると連中を組む時には、Bさんは未婚だったが結婚は決まっていたので親分をお願いした。

祭りの間の飲み食い費用は「親持ち」として親分がすべて負担する。祭りの日には、若い衆だけでなくその友達や客人もあり20人位の飲食の準備が必要となるため、妻にとっては正月より忙しい。

祭り以外には、高校卒業後、曾根町を離れた若い衆もいるので定期的な集まりは行えなくなった。それでも祭りは勿論の事、正月やゴールデンウィークには今までのように集まってくる。また最近になり定期的に、旅行に行くようになった。結婚をする若い衆も出てきており、結婚式には出席した。中元や歳暮が届くようになり、祭りで若い衆から初めてお小遣いをもらった。「お小遣いが出来るようになった事がうれしかった」とはネエサンの言葉。

### 5. 連中がない場合

曾根町と同じ曾根天満宮の氏子の中には、連中のない町もある。ここでは、どのように祭りに参加するのか伊保南部を例に見てゆきたい。

ここでは、昔は大人屋台がなかったので連中のような組織がなかったのではないかと。現在、屋台を担ぐ人は

連中とは呼ばないが、昔からの友達を中心としたグループを作っている。そこでは、10歳位の年齢差があり年上の人には「ニisan」「ネエsan」と呼びかける。

祭りに参加する男性だけでなく、その家族も決まった家（集まれる座敷がある）に集まる。締め込みなどの支度は、この家か屋台蔵の横の自治会館に集まって行う。

また、伊保南部は神社から離れているので、昼食や休憩は家まで帰らず神社横の広場とする。広場は地区により場所が定めてあり、伊保南部ではグループごとに場所取りをして利用する。ここでは、炊出しをして暖かい食べ物を出したり、帰省してきた家族や客人をもてなしたり、野外ではあるが家と同じ役割を果たす。

女性が役割分担をして買い出しから始まり、広場での場所取りなども含め「食べる事のすべて」を行う。費用は食事をした人数を自己申告して頭割りとしている。

そして現在、若い世代から親分のいる連中を作りはじめている。曾根町を参考にしながら連中の経験のない夫婦が親分として試行錯誤中である。

## 6. 女性と祭り

この調査を行うにあたり、祭りでは表舞台に登場の機会のない女性の役割にも興味があった。しかし、当の女性達に聞いても「おさんどん」が一番の仕事であるという。現在では、仕出しを利用したり、準備の簡易な鍋料理（特にカントダキ[関東煮・おでん]）が好まれるなど昔と比べると楽になってきているが、それでも大変な仕事である。

これから親分になる可能性の高い30代前半の男性に親分を引受けるにあたり大切な事を尋ねると、口をそろえて「嫁さんの承諾・理解」という。親分を引受ける事は、男性だけでなく夫婦そろっての仕事であり、若い衆に対する責任の重さでもある。

表舞台に立つ機会はないが、裏方である女性の役割は決して軽んじられているわけではない。

## 7. おわりに

曾根天満宮の秋祭りを見ていると、若い世代にとって祭りがどれほど魅力的であるか分かる。その祭りの賑いを作るのに大切なのが、連中組織が機能している事である。だからこそ、これまで連中のなかった地区でも新たに作られてきているのである。

親分のなり手がいないと言われているが、時代の流れに合わせ負担を減らす工夫も行われている。これからも様々な変化がないと続いていかないであろうし、変化があるからこそ今も続いているのであろう。



図 6-43 神社横の広場の休憩場所



図 6-44 伊保南部の前夜祭



図 6-45 親分のハッピー



図 6-46 祭りの朝に親分の家で廻しを締める

## 第8節 まとめ

民俗行事には、人々の日々の営みとは別に、時を定めて行う年中行事がある。年中行事には、家庭で行われる家の行事とは別に、村や年齢集団、信仰集団などで行うものもある。こうした、村や特定の組織で行う年中行事は、地域的広がりを持つものが多く、古くから村や地域のつながりを深める役割を果たしてきた。特に、祭礼は特定の年齢集団だけではなく、子供、青年、壮年、老人各年齢層が、共同して村や、氏子区域で行うものが多い。

特に市内の祭礼は、連中という組織が大きな役割を果たすとともに、子供から老人まで村総出で行うのが普通である。今回の調査対象とした、曾根天満宮の連中も、播磨地方南部に分布する連中の一つである。こうした連中は、荒井神社の氏子にもみられ、屋台の担ぎ手として大きな役割を果たしてきた。また、市内の祭礼では、調査を実施した生石神社や米田神社も、村の各組織総がかりの行事となっており、村及び氏子地域のコミュニティ形成に大きな役割を果たしており、今後もその役割の拡充が期待されている。

連中は、村の組織というより、同年代の男性の任意の仲間組織のため、その数や個別の活動内容を把握したものはない。こうした、祭礼や人生儀礼に深くかかわる連中組織をコミュニティづくりにどのように取り込むかは、任意の組織だけに難しいものがあるが、地域の活性化を図る上には大きな力を秘めている。まずは、その実態の把握が必要であろう。

村の行事の中で、地域の重要なイベントになっている地蔵盆は、地域総がかりの行事とはいえないが、賽の河原の石積みの話とともに、子供たちの行事となっている所も多い。

市内の地蔵盆も子供たちだけでするものが見られ、小・中学生が主体的に行事をしている。こうした行事は、地域に対する子供の帰属意識を高め、生涯に渡り故郷を大切にすることを醸成することにもつながる可能性を秘めている。また、地域コミュニティづくりの意識を子供時代に育成する大切な機会にもなる。そのためには、大人たちがコミュニティに地蔵盆がどのような役割を果たしているかを再認識する必要がある。それを、子供たちに丁寧に伝えることにより、子供たちの行事をより意義あるものにできる。

盆踊りは、各村で時期を調整して行い、青年たちが毎晩踊りを渡り歩いたという伝承は各地で聞くことができる。しかし、こうした盆踊りも、村から小学校区、さらには市町域で行う広域的なイベントに変化している。市内においても、一度は市民総出の「市民まつり」に組み込まれたが、平成5年からは、地域の夏祭りとして実施されるようになった。現在は、市の支援もなくなり地域主体の行事として

取り組まれている。民俗行事としての意識は薄れ、イベント意識が強くなっていると思われるが、今後こうした民俗行事を母体とする地域行事(イベント)をどのように育てていくかは、報告者のように伝統との接続が課題となる。

最後に、市川流域に分布し、現在は姫路市南部から高砂市西部にわずかに残る、七夕さんの着物(紙人形)について述べておく。市内に残る七夕さんの着物を棹にかける行事は、着物を人形か衣かという学術上の問題もあるが、本報告書ではコミュニティづくりという視点から考えてみたい。

本来、この行事は各家の年中行事の一つとして行われていたため、その全貌をつかむことは難しい。おそらく、行う行事は一つでも、各家で微妙な違いが見られることであろう。まず、地域における七夕行事の把握につとめ、コミュニティづくりに取り込むモデルケースをつくるのが一つの方法である。こうしたモデルケースをもとに、啓発活動に取り組むことも行政の役割である。また、こうした行事を、各家庭で形を変えずに伝承することは決してやすい時代ではなく、調査時期も急がれる。

報告では、すでに市内の保育所や幼稚園、地区の子供会で取り組まれているが、こうした組織で残す方法の拡充を図ることが当面の課題であろう。出来れば、子供会の行事を地区の行事と一体化できれば、さらにコミュニティづくりに生かすことができる。その際、地蔵盆などと同じく、その行事の意義付けを啓発する方法を工夫する必要がある。

近年、こうした民俗行事をコミュニティづくりのパーツとして、安易に行事に取り込む傾向も見られる。大切なことは、こうした行事は家や地域の年中行事の一環として行われ、家や地域を維持する大切な行事であったことを把握しておく必要があることだ。また、本報告で上げた地域の特徴を残す行事は、その地域の必要性のもとで残されたものであり、できるだけ伝承する努力をし、活用を図る必要があるといえる。

そのためにも、本書に取り上げた事例は大切な資料であるとともに、新しい地域創造のヒントを見出すものでもある。ぜひ、市民だけではなく多くの人々に活用されることを期待する。